

### <追悼文>井上奉生先生のご逝去を悼む

佐藤, 典人 / SATO, Norihito

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

55

(開始ページ / Start Page)

89

(終了ページ / End Page)

90

(発行年 / Year)

2023-03-20

## 井上奉生先生のご逝去を悼む

法政大学人間環境学部の前・教授で、かつ本地理学会の副会長（2009年度～2014年度）をはじめ、常任委員などをも務められた井上奉生（いのうえともお）氏は、2021年12月11日に病のため、さいたま市にて逝去されました。享年79歳でした。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

小生が学部の学生時代からご教導を賜った井上先生を、後輩として眺めていた折々の場での事柄の記憶を辿りつつ、差し出がましいけれども人情味溢れる先生の人柄をしばし偲びたいと思います。

井上奉生先生は1942年に現在の中華人民共和国東北地方の黒竜江省チアムスー（佳木斯）の陸軍官舎で生を受けました。当時、先生のご尊父は軍人として満州に赴任していたようです。その後を迎えた終戦を挟んでご一家は難儀を窮めつつ、満州から帰還されたと仄聞しております。

高等学校まで過ごした盛岡市を離れ、縁あって井上先生は法政大学文学部地理学科に進学されました。1966年に同学科を卒業されたのに続き、法政大学大学院人文科学研究科地理学専攻修士課程に進み（1969年修了）、さらに同博士課程で学ばれて1975年にその課程を満期修了しました。その一方で1966年4月に（財）資源科学研究所の助手として任用され、同研究所に勤務されました。

懐かしさとともに回想すれば、小生が井上先生と知己を得たのは、先生が上記の（財）資源科学研究所に勤務しながら、並行して大学院生として研究に専念されていた時期であります。

その後、（財）資源科学研究所が現・国立科学博物館に併合されるのを機に、井上先生は某企業傘下の(株)地域開発コンサルタンツに請われて転身し、要職に就かれました。それまで体得した該博な識見を発揮し、時の世相を投影した『地域開発』に関わる業務で東奔西走の日々だったようです。

民間企業で実務を積む貴重な経験を経た後、1987年に法政大学第二教養部（夜間の教養課程）



へ助教授（今日の「准教授」）として採用されました。また1995年にはスウェーデン国立農業大学環境分析研究所に客員教員として勤めました。この留学先には先生が高等学校以来、集中的に取り組んできた分析化学への学問的興味が根底で連関していると推知できます。さらに法政大学が組織改革の一環として第二教養部を改組して1999年度から新たに「人間環境学部」を立ち上げる際の学部長（1997～1998年度）という重要な責務を担いつつ、それをスムーズに移行し終えました。と同時に、1999年に人間環境学部教授に昇格しました。それ以降、法政大学の定年制度に則って満70歳で退職されるまで、同学部で陸学分野を核とする「水文（すいもん）学」をテーマに据えた講義やゼミナールを担当していたと耳にしております。

ところで小生が井上先生を知ったのは既述した時期ですけれど、その契機は先述の（財）資源科学研究所の現地調査補助員の求人小生が応募したからです。その結果、都立大学（当時）など他大学の学生と知り合え、とても有益なバイト三昧で

した。その時の現地調査の1つが東海村原発の冷却水（温排水）の海域における拡散状況の観測把握（1967～1968年頃）でした。排水追尾のマーカーとして“マラカイドグリーン”を海中に投じ、それを船で追跡した光景が今でも鮮明に思い浮かびます。その調査時の合間の一コマが写真1です。

小生はこれを機会に（財）資源科学研究所のアルバイトを井上先生の下で継続することにしました。そのお陰で、むつ市の田名部川放水路の塩水遡上調査にも同行させて頂き、現場での調査法の術を学び得て非常に有意義でした。ただし1つを除いて。その1つとは全調査を終えた打ち上げの折、調査に関わった全員が揃った反省会でアルコールを勧められた事です。“君は秋田の人間なのに酒を飲めないの？”と、半ば強引に飲まされました。今流に申せば、ある種の“パワハラ”かも？ その井上先生はと申せば、こよなく日本酒を愛（め）でていたように映りました。又聞きながら、盛岡の井上先生のご家は酒販業を営んでいると伺っていらしたので“さすが日本酒に強いんだなあ！”と末席でいたく感心しつつも、内心では下戸ゆえにこの会合を早々にお開きにして欲しいと、淡い期待を込めて私は着座していたものでした。

化学に精通していた井上先生ゆえ、水質調査やその分析には非常に精緻なレベルまで我々に要請されました。かくして現地調査の骨子立案や現地での観測手順を主導する井上先生を間近で拝見す



写真1 東海村で調査中の一コマ

（浜辺に迷い上がったウミガメを囲んで。左端：井上先生、右端：佐藤／1968年夏）

ることが叶い、学ぶべき点が多かったものです。

数多くの井上先生の研究業績の中で、僭越ながら小生の脳裏に刻まれているのは、縦谷に沿って流下する北上川本川の水質に寄与する左右両岸からの支流の意義への視座です。即ち、周知のように左岸からの支流は古生層を主とする北上高地から流入する一方、右岸から合流する支流は奥羽山脈に源を發します。かくて明らかに地質が異なるので自ずと水質も違って然るべきとの着想です。その視点の延長上で河川水質の本来の起源である降水成分から掌握する必要性を覚知し、風送塩への追究に帰着したと理解しております。それは「東北地方北部における雨水中の塩素イオン濃度分布と地形との関係について」（1971）、「北上川流域における空中塩分の降水特性」（1990）、「空中塩分の標高別降水特性」（1993）などの論考に色濃く反映されており、極めて示唆に富む言説です。

私なりの観察では、先生のご趣味は溪流釣りとクレ射撃でした。とりわけ前者で、北秋田市の“マタギの里”に近い柚（そま）温泉の主人とのご厚誼こそ、先生の人生に彩りを添えています。先生の日本酒好きの印象が強いものの、有志の宴席でたった1度だけ拝聴した“南部牛追唄”は、福田こうへい顔負けの節回しと美声で、一同、感嘆のあまり眼が点に…。



写真2 春の南部富士（岩手山）の山容

先生が幾度も登られたと聞く郷里の南部富士（岩手山／写真2）の雄姿を胸に抱き、井上先生、どうぞ安らかに眠り下さい。奥様をはじめご遺族、ご親族の皆様には心から哀悼の意を表します。

【佐藤 典人】